90 SCC RIA Kit の基礎的検討と臨床的評価

羽渕洋子，濱崎利子，尾藤早苗，日野　恵
池窪勝治（神戸中央市民　核）
池内正憲，高島英世（同　婦）
谷口郷美（同　耳），中井　準（同　内）

扁平上皮癌関連抗原（Squamous Cell Carcinoma Related Antigen SCC）測定用 RIA Kit（ダイナボット社）の基礎的・臨床的検討を行い若干の知見を得たので報告する。

基礎的検討としてはインキュベーション温度と時間の影響，測定値の精度および再現性につき検討した。臨床的検討としては健常人，婦人科疾患，肺疾患および耳鼻科疾患の血中 SCC 濃度を測定し，扁平上皮癌の診断と治療後の follow-up の有用性につき臨床的評価を行なった。

Kit 規定の測定条件（室温，20〜30時間のインキュベーション）で良好な標準曲線が得られ精度，再現性も良好であった。健常者（35）の血中 SCC 濃度は平均1.6±0.4（SD）ng／mlで，2.4ng／ml（平均＋2SD）以下を正常範囲とした。未治療の子宮頸部癌，肺扁平上皮癌，舌癌および下咽頭癌で SCC 高値のものがみられた。また子宮癌の既往があり膵癌で死亡した1例では140ng／ml の異常高値を認めた。一方，良性疾患では低値であった。治療が有効な場合 SCC 濃度は急速に低下した。以上から SCC は腫瘍マーカーとして臨床上有用であると考えられた。

91 原発性肺癌における血清 TA－4 の臨床的検討

向田邦俊，中西敏夫，佐々木正博（広大　放部）
小山　矩，勝田静知（同　放科）

子宮頸部扁平上皮癌から抽出された Tumor Antigen Ⅳ（TA－4）は扁平上皮癌に特異的と報告されている。今回我々は肺癌患者132名の血清 TA－4を測定し，肺癌における臨床的意義を検討した。

肺癌患者の陽性率は39.4％で，組織型別では扁平上皮癌 56.6％，腺癌 26.5％，小細胞癌 24.0％と扁平上皮癌の陽性率が有意に高値を示した。なお，同一血清で測定したＣＥＡの陽性率は扁平上皮癌 39.6％，腺癌 59.2％，小細胞癌 56.0％であった。病期別では扁平上皮癌Ⅰ期の陽性率は47.4％と高率で，病期との相関はみられなかった。治療前後の TA－4値の変動の検討では，治療効果を反映する傾向がうかがわれた。

以上より TA－4は扁平上皮癌に対して臨床上有用な腫瘍マーカーと思われ，特に早期例における診断的有用性も示唆された。

92 Neuron Specific Enolase（NSE）RIAの基礎的ならびに臨床的検討

長倉徳積，原　秀雄，九島健二，佐藤龍次，
伴　良雄（昭和大 三内）　真鍋嘉尚，尾崎修武
伊藤国彦（伊藤病院）

腫瘍マーカーとして開発されたNSERIAの基礎的ならびに臨床的検討を行なったので報告する。対象患者は肺癌19例，甲状腺癌41例，良性甲状腺腫18例，バセドウ病８例，糖尿病14例，感染症７例，妊婦７例ならびに健常者28例である。　アッセイ内および間平均変動係数はそれぞれ，4.4％，4.9％，平均回収率は103％，CEA，AFP，IAP，TPA CA19-9との交叉性はみられず，血中NSE 測定は十分可能であった。標準へモグロビン（Sigma）の添加では測定に影響はみられなかったが，溶血血清では著しく高値を示し測定に不適当であった。　肺癌のNSE陽性率は37％であった。甲状腺癌では27％，良性甲状腺腫及びバセドウ病では０％であり，甲状腺疾患に陽性率の高いTgとの併用で甲状腺癌診断のマーカーとして有用性が示唆された。また血清とEDTA-2Naによる血漿におけるNSE濃度を比較したところ，健常者では両方の測定値に差はなかったが甲状腺癌６例ではEDTA血漿では全例陽性を示し，陽性率の向上にEDTA使用が有用と考えられた。

93 神経特異的 Enolase（NSE）の Radioimmunoassay（RIA）－肺小細胞癌における臨床的評価－

末廣美津子、村上　稔、西川彰治、石村順治、
福地　稔　（兵庫医大　RI）

NSE は、多くの神経外胚葉、神経内分泌系組織由来の癌細胞中に存在することが知られており、これらの癌には、肺小細胞癌が含まれる。我々は、NSE の RIA につき、基礎的検討を行うと共に、肺小細胞癌での臨床的評価を行った。

NSE の RIA は、Pharmacia 製のを用いた。基礎的検討では、測定法に要求される諸条件を、満足することが確められた。健常人における血中 NSE 値は、3.4〜11.5μg/ℓの範囲を示し、平均6.0±1.8μg/ℓであった。これに対し、肺癌では、小細胞癌で28.0±33.3μg/ℓ、大細胞癌で8.3μg/ℓ、腺癌で13.4±28.4μg/ℓ、扁平上皮癌で8.9±4.1μg/ℓであった。小細胞癌を Stage別でみたところ、Stageの進行と共に、NSE値は上昇する傾向を示し、また、治療経過をみた４例のうち、死亡した２例では、92μg/ℓ以上となり、治療効果が認められた２例では血中 NSE 値は減少した。

以上の成績から血中 NSE 値の測定は、肺小細胞癌の病態把握に臨床上有用との結論を得た。

Presented by Medical*Online